矢作川流域はSDGsの事例の宝庫

── 流域研究と地域連携の取組みを中心に ──

主席研究員　河原林孝由基

1　「流域は一つ、運命共同体」を合言葉に

矢作川（やはぎがわ）は長野県に源を発し南西方向に長野・岐阜・愛知の３県にまたがって流れ、豊田市の中心部を貫いて三河湾に注ぐ一級河川である。本川の長さは118km、流域（降った雨が川に注ぐ範囲）の面積は1,830㎢、流域内の人口は130万人を抱える（第１図）。

流域内には1,900mの標高差があり、冷涼な山間の源流部では亜寒帯性の針葉樹林、温暖な河口付近に向かって温帯性の落葉広葉樹林、暖帯性の常緑広葉樹林などの様々な植生が認められる。上流から中流には流域面積の７割にあたる森林が広がり、中流から下流にかけては一大農業・工業地帯となる。明治用水をはじめ農業・工業・上水道用水の取水や電力供給のため河川利用率は平均40%を超える高さとなっている。

第１図　矢作川流域地図

出所　豊田市矢作川研究所「矢作川探訪マップ」

このように矢作川流域には様々な気候・植生のもと多様な生態系があり、農山村から工業都市まで人々の営みがある。

高度経済成長期には流域開発による環境劣化が進んだ時期もあったが、沿岸の農業・漁業団体や自治体によって1969年に設立された「矢作川沿岸水質保全対策協議会（矢水協）」の取組みに代表されるように「流域は一つ、運命共同体」を合言葉に、水質保全と上下流の連携など環境保全活動に取り組んできた長い歴史がある[(注1)]。今では流域全体で住民による多様な交流へと環境活動は展開している。

2　川を知り、流域の未来を描く

矢作川には全国でも珍しい流域を対象とする研究機関がある。設立の経緯は、90年代にアユが釣れなくなるなど河川環境の変化が問題視されるなか、豊田市とその関係者による視察調査団が河川管理の海外先進地に派遣され、そこで地域の川の情報が集約された博物館（ドイツ・バイエルン州ローゼンハイム「イン川博物館」）があることを目の当たりにしたことに始まる。河川環境の改善には一つの川に一つの博物館があるように「一つの川に一つの研究所」が必要との機運が高まり、関係者の努力の末、94年に矢作川漁業協同組合、枝下（しだれ）用水土地改良区（現豊田土地改良区）、豊田市による第三セクター方式で「豊田市矢作川研究所」が誕生した（2003年に豊田市の行政組織に編入）。

現在、同研究所は創立26年目を迎え、研究部門には７人の専門家（森づくり班、川づくり班）を擁し、３人のアドバイザーを含め総勢14人の体制となっている。「川を知り、流域の未来を描く」ことを標榜し、「豊かできれいな水

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

の回復と人々の生活にうるおいとゆとりを与える矢作川」であるために、①流域の生物や川の利用の科学的・歴史的調査と研究、②流域情報の公開、③流域環境の保全に関わる諸団体の連携サポート、の３つを軸に活動を行っている。

3　「流域圏担い手づくり事例集」の刊行

持続可能な流域圏のあり方を模索し流域全体の発展につなげることをめざす民・学・官連携組織「矢作川流域圏懇談会」が、国土交通省豊橋河川事務所のイニシアティブのもと同研究所も参画して2010年に立ち上がった。同懇談会は山部会、川部会、海部会で構成され、各部会で学識者・行政、森林組合・漁協・土地改良区といった関係団体、市民団体などのメンバーが連携・協働して地域の課題を抽出し、その解決方法を探っている。

同懇談会山部会では、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分け、とりわけ、水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいる「人と山村の問題」に取り組んでいる。その解決の糸口となるべく13年度から４年間をかけ、流域で主に中山間地振興に携わる団体（一部、川や海の活動団体も含む）を取材し記録にまとめ、流域内の多様な主体によるネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」を都合４冊刊行した。17年からは、取材先に川や海の環境保全や水辺空間の再生・利活用に携わる団体を増やし、タイトルを「流域圏担い手づくり事例集」と改めて都合２冊刊行している。(注2)

総取材先数は延べ119団体、地域は上流域の長野県（平谷村、根羽村他）にはじまり岐阜県（恵那市）、中・下流域の愛知県（設楽町、豊田市、岡崎市、安城市、西尾市他）と流域全体に及んでいる。いずれの取材先も、流域内でヒト・モノ・カネがフェア（公正）に循環し、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が進むことを企図して事例をピックアップしたものだ。事例集づくりを通して取材先の「気づき」を促し、取材先・取材者・同懇談会との間に新たな交流や企画も生まれるなど流域内でさらなるネットワークの広がりをみせている。「良いインタビュアーは良いセラピスト」とも言われるゆえんだ。

4　流域の一体感がSDGsの事例を生む

事例集に掲載された119に及ぶ団体の活動内容を振り返ると、その多くが国連が掲げるSDGs（持続可能な開発目標）に符合している。森・川を中心とした取組みは、直接的には目標15の「陸の豊かさも守ろう」に合致する。それだけでなく、健康な生活、教育、クリーンなエネルギー、働きがいのある雇用、インフラ・基盤の整備、住環境、責任ある生産と消費、気候変動への対処（目標３、４、７、８、９、11、12、13）などにも貢献していることが分かる。それを流域内の多様な主体によるパートナーシップ（目標17）により実現しているのである。

SDGsの目標達成には「経済×環境×社会」の課題が複雑に絡み合っており、統合的・同時解決のアプローチが必要といわれる。地域には様々なステークホルダーが存在するが、それぞれで活動していては必ずしも地域全体の課題解決につながらない場面がでてきた。矢作川流域では「流域は一つ、運命共同体」を合言葉に同じ流域で暮らすという住民の一体感が、魅力的で活力ある「地域づくり」を可能にしているといえよう。

（かわらばやし　たかゆき）

（注１）矢水協の取組みは「矢作川方式」とも称され流域管理の先進例とされる。矢作川をめぐる一連の環境活動は、矢作川漁協100年史編集委員会（2003）『環境漁協宣言―矢作川漁協100年史』風媒社に詳しい。

（注２）「事例集」の計６冊はホームページに公開（データベース化）されている。
http://www.cbr.mlit.go.jp/toyohashi/kaigi/yahagigawa/ryuiki-kondan/ryuikijirei.html

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/